

マティアス・ゲルツァー著

長谷川博隆訳

## 『東ローマ政治家伝』 I カエサル、

II ポンペイウス

名古屋大学出版会 二〇一三・八刊

A5 各四六〇〇円

I 四三二頁、II 二九四頁

本書は二十世紀における古代ローマ共和政期研究の泰斗、マティアス・ゲルツァーによる『ローマ政治家伝』シリーズ全三巻のうち、第一巻『ローマ政治家伝 I カエサル』(以下『カエサル』)と第二巻『ローマ政治家伝 II ポンペイウス』(以下『ポンペイウス』)の翻訳である。翻訳は、かのモムゼンの大著も手掛けた長谷川博隆氏によってなされている。著者は、共和政ローマの転換期に活躍した政治家を通して、ローマ社会の仕組みを理解することを研究目標に掲げてきた。本書シリーズはその集大成とも言えるよう。

まずは『カエサル』について述べたい。本書は六章から構成される。第1章「政治的背景」では、カエサル登場以前のローマの社会状況を共和政の確立から遡り概観し、カエサル台頭前のローマ社会が抱えていた問題を鋭く指摘する。著者は、当時のローマは公共体としての国家から属州帝国へと変質を遂げている最中にあり、旧態の統治機構がその変化に対応できていなかったと述べ

るのである。続く第2章「政治世界への登場と栄達」では、閥党派と民衆派との間の権力闘争の場と化し、機能不全に陥っていたローマの中枢において、如何にしてカエサルが台頭していったのかを扱う。第3章「執政官職」では、執政官時のカエサルの政策とそれに反対した閥党派との対決を、第4章「執政官代理職」では、カエサルの業績のうちでも燦然と輝くガリア遠征の足跡を辿り、第5章「内乱」では、如何なる経緯でカエサルとポンペイウスが対決することになったのかを検証する。そして第6章「勝利と破局」では、内乱の集結からカエサルの暗殺までを扱い、カエサルが当時のローマ社会に如何なる影響を与えた、もしくは与え得たのかを考察する。

続いて『ポンペイウス』について述べたい。本書は十二章から構成される。第1章「序説」は『カエサル』と同様に、ポンペイウス台頭以前のローマの社会状況を概観する。第2章「権力の座に」では、ポンペイウスが如何にして当時のローマ社会で頭角を現していったのかを検討する。著者はポンペイウスが通常の官職の階梯を経ず、混乱の時代の潮流にのって軍事力を背景にローマの政治世界の中心に躍り出た例外的存在であったことを強調する。第3章「レピドウスの蜂起とセルトリウス戦争」では、ポンペイウスがその権力基盤を固めるために寄与した二つの軍事行動を取り上げる。第4章「第一次執政官職」では、非元老院議員として独特な存在感を放っていたポンペイウスがローマの政治世界に本格的に介入していく様相を描く。第5章「海賊戦争」、続く第6章「ミトラダテス戦争と東方の新秩序」では、ポンペイウスが帝国

東方地域で庇護関係を得るにいたった経緯を考察する。第7章「帰還」ではポンペイウスがローマの政治世界へ帰還し、政争に巻き込まれていく様子を叙述する。第8章「三頭同盟」、第9章「三頭同盟の更新と第二次執政官職」、そして第10章「第三次執政官職」では如何にしてポンペイウスとカエサルが手を組み、また疎遠になつていったのかを考察する。第11章「内乱の勃発」では、もはや決定的となつたカエサルとの対決に際し、ポンペイウス陣営のとつた行動を分析する。第12章「デュッラキオン、ファルサロス、最期」では、戦いに敗れたポンペイウスがどのような行動をとつたのかを考察する。

本書『カエサル』、『ポンペイウス』の特徴はその記述の忠実さにあろう。著者は結論を急いでいない。本書は各章ごとに何か特別な主張や結論を設けておらず、時間の流れに則り、厳格な史料批判のもと、政治家の足跡が粛々と書き進められている。これは当時の社会を政治家を通して見ようとした著者の問題意識に起因する。そして、著者はその狙いを達成すべく三つの視座『カエサル』、『ポンペイウス』、『キケロ』を設えたのである。残る『キケロ』の翻訳が待たれる。

(阿部 衛)